

《研究ノート》

表現の自由と女性差別

——ポルノグラフィ規制は道德の問題か女性差別の問題か——

池 端 忠 司

目 次

はじめに

I あるフェミニストの見解

- (1) ポルノグラフィの定義
- (2) ポルノグラフィに対するフェミニスト批評
- (3) 猥褻法理に対するフェミニスト批評
- (4) 非人間化批評と暴力性批評の限界

II ある懷疑主義者のマッキノン批判

- (1) 懷疑主義の言論の自由の原理論
- (2) マッキノンのフェミニスト批評に対する評価
- (3) ポルノグラフィ製作過程に関与する女性が被る害悪
- (4) ポルノグラフィの普及によって全女性が直接被る害悪
- (5) ポルノグラフィが性的現実を構築することによって全女性が被る害悪
- (6) 女性差別という問題を解決する戦術としての不適當さ

III 私見

- (1) 奥平説
- (2) 奥平説の検討

おわりに

「映画館で彼女は三回も席を移らねばならなかったが、その都度、兵士がしつこくそばによってきたため、彼女はとうとうカビ臭い壁ぎわまでおいつめ

られ、バカみたいな柱のためニュースがほとんど見えなくなりました。もう立ち上がって席を変えたりするものかと心に決めたとき、兵士がもういちど立って、彼女のとなりに座った。」

ジョン・アーヴィング著・筒井正明訳『ガープの世界 上』

新潮文庫 (1988年) 7 頁から

はじめに

猥褻をめぐる議論は表現の自由のディスコースにおいてお馴染みである。ある主張がなされるまでこの議論は性道徳と表現の自由の調整という点で問題になってきた¹⁾。しかし1980年代前半アメリカ合衆国においてこの問題の建て方自体に異議を唱える主張が登場する²⁾。それは法学者であるマッキノン(Catharine A. MacKinnon) と作家であるドゥォーキン (Andrea Dworkin) に

- 1) 性道徳対表現の自由の議論の延長線上にある日本の議論に清水英夫「第六章「猥褻」の終焉 一法と道徳と言論の自由」『法とマス・コミュニケーション』社会思想社1970年) 170-235 頁, 奥平康弘「性表現の自由になぜこだわるか」奥平康弘・環昌一・吉行淳之介『性表現の自由』有斐閣 (1986年) 101-72頁。さらに猥褻物やポルノグラフィの社会に与える悪影響を調べ子供の保護や見たくない者の保護を例外にして性表現の解禁の契機となった猥褻に関する報告書の紹介として田宮裕「おいせつに関するアメリカ大統領委員会の報告書について(一)・(二)」『ジュリスト』No.477 (1971年) 93-97 頁・No. 478 (1971年) 111-18頁。
- 2) アメリカのポルノグラフィ規制の理論と実践を知るのに役立つ文献として紙谷雅子「アメリカにおけるフェミニズムとポルノグラフィ規制の動き」『自由と正義』38巻12号 (1987年) 44-53頁, 内野正幸『差別的表現』有斐閣 (1990年) の「7 女性差別表現としてのポルノ」(180-221頁) 参照。両者には微妙なニュアンスの違いはあるものの、どちらもフェミニストの主張に共感を示しながらも、法的な議論としてポルノグラフィ規制という手段の持つ限界を指摘している。とくに両者の共通点は第一に「ポルノグラフィ」の定義の問題つまりその不明確さを問題にしているし、健全なエロティシズムとの区別が難しいという点をあげる。第二にポルノグラフィの存在が社会の女性差別を維持し促進しているという意味で何らかの弱い因果関係を認めはするが、ポルノグラフィが現実の社会の女性差別の主たる原因とは考えず、むしろ社会経済的なものの反映であると理解し、ポルノグラフィへの法的な規制には消極的であり、女性の社会進出を促す社会構造の変革, 男女平等の教育などが差別をなくす手段であると理解する。ポルノグラフィ規制ではなく、ポルノグラフィに対する市民レベルの反対運動に止まることが重要であることを指摘する。そしてその市民レベルの運動については行動する女たちの会編『ポルノ・ウォッチング』学陽書房 (1990年) 参

よってなされた。彼女たちはその主張をフェミニスト批評と呼ぶ。その議論では性道徳の維持のために猥褻を取り締まる法理も批判されるし、どんな性表現も保護すべきであると唱えるいわゆる自由主義の法理³⁾も批判される。そして彼女たちはポルノグラフィと呼ぶ性表現の一群こそ規制すべきであり、これまでの猥褻をめぐる議論において、猥褻と呼ばれてきた性表現はポルノグラフィに比較すれば害がないと主張する。彼女たちにとって猥褻な表現を取り締まる法理も、性表現の解放（子供への配慮などを例外とするが）を唱える自由主義の法理も、ともに男性の優越性に仕えるものであり、性表現をめぐる真の問題は性道徳の問題でもなければ、単に人一般の表現の自由の問題でもなく、女性に関わる表現の問題であり、女性差別と表現の自由の関係が議論の中心でなければならない。

彼女たちは性表現の禁止という時に一般に思い浮べる反社会的な逸脱した性表現を槍玉にあげない。むしろわれわれの現実を映しだしているとも言える男女の支配服従関係を描写し記述する性表現であるところのポルノグラフィに焦点を当て、それが生み出す害悪を捉えようと努めている。ポルノグラフィは、無防備な少女の体に加える性的な侵犯（日本ではいたずらと一般に言われる）、成人になった後には、見も知らぬ人から上司、知人、家族、恋人、夫に至るまであらゆる社会関係における痴漢、強姦など女性に対する性暴力を誘発し、なおかつそれを見えなくさせる効果を持つ。それは、いくらか空想を加味させながら、一般的に受け入れられている支配服従の関係としての男女の性的な現実を創り出し、他の社会的な関係における男女の関係を支配服従の関係に止め置く効果を持つ。ポルノグラフィは資本主義の論理つまり社会（生産者と消費者

照。その他には同趣旨の主張するものに清水英夫『情報と権力』三省堂（1984年）197-98頁、松井茂記『マス・メディアと法』入門 弘文堂（1988年）200-1頁、横田耕一「女性差別と憲法」『ジュリスト』No. 819（1984年）68-74頁。

3) Emerson, Pornography and the First Amendment: A Reply to Professor MacKinnon, 3 Yale L. & Pol'y Rev. 130 (1984). は本稿で紹介するマッキノンの論文に対する直接の反論である。ポルノグラフィ規制が現在最高裁で認められている表現の自由の保護を受けない例外のどれにも入らないこと、政治のダイナミックスにより規制権限が必ず濫用されること、女性差別をなくすための法的な手段はわれわれに開かれていることなどを論じている。

の関係)を経由し制度的に女性差別を生み出す。

このポルノグラフィが女性差別を生み出すという主張に対して、表現の自由を擁護する側からつぎのような反論が出ることは容易に予測される。性的な表現のうちのポルノグラフィだけを規制するとしてもやはり猥褻規制のときに問題となったようにポルノグラフィとそうでないもの(たとえば芸術作品)を区別することは難しく、他の表現が犠牲になることを覚悟しなければならない。またかりにポルノグラフィを他の表現と区別することが可能でも、既存の性道徳を維持したいという強い要求が社会に存在する以上、性道徳というコンテキストからポルノグラフィ規制は解釈され、規制目的がたとえ男性優越主義、女性蔑視の社会規範の変革であったとしても、そのための規制権限を国家に与えることは、国家が男性優越主義に適った女性のイメージ(たとえば良妻賢母)をより巧妙な方法で創り出す機会を持つことを意味する。つまりフェミニスト批評は政治的な利益、権力闘争に左右される国家の規制権限によって利用され、フェミニストの最終目的とは逆の効果をもたらすというものである。

たしかにポルノグラフィが性道徳の観点からみれば、それが猥褻と同様に道徳に関わることは否定できない。しかしマッキノンは敢えてその論文の一つに『道徳の問題ではない』⁴⁾という表題を付けている。本稿はフェミニストの主

4) Catharine A. MacKinnon, Not A Moral Issue, 2 Yale L. & Pol'y Rev. 321 (1984). なお最近のマッキノンの文献として MacKinnon, Reflection on Equality Under Law, 100, Yale L. J. 1281 (1991); MacKinnon, Sexuality, Pornography, and Method: "Pleasure and Patriarch", ed. Cass R. Sunstein, Feminism & Political Theory (Chicago and London: Univ. Chicago Press (1990)). またマッキノンの見解を理解するのに不可欠な邦訳書としてアンドレア・ドウォーキン著・寺沢みづほ訳『インターコース：性的行為の政治学』青土社(1989年)、同著・同訳『ポルノグラフィ：女を所有する男たち』青土社(1991年)、邦訳論文としてキャサリン・マッキノン著・鈴木由美訳「セクシュアル・ハラスメント：裁判におけるこの十年(1986)」『現代思想』Vol.20-1(1992年)125-42参照。さらにマッキノンとドウォーキンの主張のドイツでの波紋つまり『エンマ』誌のアリス・シュヴァルツァーによる反ポルノ・キャンペーンと反ポルノ法案をめぐる議論を報告するものにシェーラ・オイラー＝クック著・三島憲一訳「女性とポルノグラフィ」『日本・ドイツ 女性の新しいうねり』東京ドイツ文化センター編河合出版(1990年)160-91頁がある。

同じフェミニストの立場からマッキノン/ドウォーキンの立場に批判的なものにリン・シーガル著・織田元子訳『未来は女のものか』勁草書房(1989年)161-78頁参照。イギリスで活躍する社会主義フェミニストと言われるシーガルの見解では「しか

張のその紹介に有りがちな断片的なゆえにただ衝撃的な紹介を避けるために、この論文の全体の流れを紹介することによって彼女たちの主張の真意を汲みたい。われわれはマッキノンのこの論文からポルノグラフィ規制と猥褻規制の違いがどれほど説得的に説明されているかを判断することができるであろう。

また彼女のこの論文だけを対象にした批判ではないが前述した反論とおおよそ同趣旨の見解を表明するやはり合衆国の法学者の見解⁵⁾をつぎに紹介したい。その論者は自説をラディカルな懐疑主義と呼び、人間が、道徳的なもの、政治

しそれでもなお、ドゥォーキンのように、ポルノは『男の至高の権力』を描写しているだけでなく、作り出してもいるのだと考えるのは、単に誇張というにとどまらず、根本的に間違った論法であると思う。」(162頁)であり、また同調できるあるフェミニストの見解を引用する。「というわけで、私はポルノをその象徴作用ゆえに批判するのはお門違いだと思う。性差別的な記号作用一般についての私たちの論じ方一意味はどういう作用で作り出されるか、なぜそれは不愉快なのか、についての私たちの論じ方を洗練するの でなければ、私たちは誤解される危険がある。(中略)『性差別的』『不愉快』『蔑視的』とかいう語についての私たちの説明は不思議なほど未発達である。」(174頁)この指摘は引用者(シーガル)の意図には反してではあるが問題の本質を突いているように思われる。その語彙が不思議なほどなぜ未発達なのか問題であり、その言葉を洗練し女性の言葉を豊かにするためにポルノグラフィ規制(そのための公的な制度)が必要かどうかが問われていると思われるからである。

女性の性意識、性暴力の実態を知るうえでモア編集部『モア・リポート NOW』集英社(1990年)参照、多くの男性が抱く性についての常識的な見解(科学的とは言えない)を代表すると思われるものに小浜逸郎『男はどこにいるのか』草思社(1990年)参照、その他に性やフェミニズムを理解するために参考にした主な文献に「特集 ポルノグラフィ」『現代思想』Vol.18-1 青土社(1990年)、ユーリッヒ・フロム著・鈴木晶訳『愛すること』、澁澤龍彦『エロティシズム』中公文庫(1984年)(サド研究者の澁澤氏の見解は当然フェミニストの見解ではないが性、猥褻の認識のレベルでドゥォーキンと一致することは興味深い。)、男性がフェミニストの立場でものを書き言うときの取るべき基本姿勢を論ずるものに大橋洋一「男がフェミニズム批評をするとき」『女と表現：フェミニズム批評の現在』(New Feminism Review, Vol.2)学陽書房(1991年)182-87頁、小林秀雄がある女性作家の作品に寄せた一文を素材に男性中心の文学批評の一面性をよく伝えていると思われるフェミニスト文学批評として黒沢亜里子「少女たちの地下同盟」『女と表現：フェミニズム批評の現在』(New Feminism Review, Vol.2)学陽書房(1991年)81-95頁、フェミニストの歴史観についてリーアン・アイスラー著・野島秀勝訳『聖杯と剣：われらの歴史、われらの未来』法政大学出版会(1991年)、フェミニストの権力論を知るうえで江原由美子「『社会的権力』の理論化はいかにして可能なのか? : 『文化主義批判』論争再考」『現代思想』Vol.20-1(1992年)90-102頁参照。

- 5) Steven G. Gey, The Apologetics of Suppression: The Regulation of Pornography as Act and Idea, 86 Mich L. Rev. 1564 (1988).

的なものについて正しいあるいは最良の認識を獲得できる見込みについて懐疑的な立場を表明する。この立場はマッキノンの見解に対して批判的であると同時に、これまでの自由主義の法理に対しても批判的である。その理由は自由主義の法理も言論規制を正当化するときに道德原理を明示的ではないにしろ導き入れてきたと理解するからである。それゆえここでの議論はこれまでの言論の自由を支えてきた法理に、相異なる根拠ではあるが批判的な両者のそれであり、自由主義の法理にとってはいわば欠席裁判である。したがってこの両者の議論は自由主義の法理の評価という点では不十分なものである。だがマッキノンの主張を評価するという一点からすれば決して無意味とは言えないであろう。なぜなら一方はポルノグラフィ規制は道德の問題ではないと断言し、他方はやはり道德の問題に行き着くのだと主張しているからである。それはわが国での同種の問題を考えるうえでも非常に参考になると思われる。そして両者の主張の対立がいったいどこから来るか、ある論点ではなぜその議論が噛み合わないかなどを考えながら議論を整理したうえで、ポルノグラフィ規制については議論の建て方自体を変えなければならないとするフェミニストの主張にどれほど意義があるかを検討できればよいと思っている。

I あるフェミニストの見解

マッキノンは先の論文の中で大きく三つのことを論じている。第一に自由主義者の捉えるポルノグラフィ観、セクシュアリティ（性のあるべき姿）観とフェミニストのそれらを比較しながら、ポルノグラフィとは何かを説明し、第二に猥褻の法理がポルノグラフィに対するフェミニスト批評といかに別ものかを説明する。そして第三にポルノグラフィが女性を非人間化するという自由主義的な批評の限界を明らかにする。

(1) ポルノグラフィの定義

先に述べたようにマッキノンは「ポルノグラフィ (pornography)」という

言葉に彼女独自の意味を与えている⁶⁾。いかなる言葉の定義もその言葉のコンテキストでの使われ方を伝達できないだけでなく、その意味をも伝達できないとマッキノン⁷⁾は述べるが、彼女がポルノグラフィに与えた意味はその言葉の法的な定義においてかなり適切につかめていると自称する。それはつぎのようなものである。ポルノグラフィとは画像であれ文字であれ明らかに性的な女性の従属を写實的に描いたものであり、しかもつぎの要素の一つまたはそれ以上含むものをいう。(1) 非人間化されたものとして、つまり性的対象、単なる物または商品として女性を見せること。(2) 苦痛または屈辱を楽しむ性的対象として女性を見せること。(3) 強姦されながら性的快楽を経験する性的対象として女性を見せること。(4) 縛られ、骨抜きにされ (cut up)、不具にされ (mutilated)、あざを負わされ、あるいは身体に損傷を負わされた性的な対象として女性を見せること。(5) 性的な従属、性的隷属、または性的な陳列品 (display) の姿勢をとらせ女性を見せること。(6) 女性の身体の一部—陰部や胸部や臀部に限らず—をまるでその一部分に女性が還元されるかのように見せること。(7) 娼婦が本性であるかのように女性を見せること。(8) 物や動物に犯された存在として女性を見せること。(9) 女性を汚く (filthy) あるいは劣ったものとして見せ、出血させ、あざを負わせまたは傷を負わせるような退廃、損傷、拷問のシナリオのもとで、しかもこれら出血させ、あざを負わせまたは傷を負わせる状態を性的なものにさせるコンテキストで女性を見せること。さらにこの定義には女性のところに男性、子供、性転換者も入り、ポルノグラフィは以上のように性差に基づく差別であり、市民権の侵害である⁷⁾。

またマッキノンはジェンダーとセックスという言葉をどのように使うかを説明している。それによれば、セックスとジェンダーの区別はさまざまなされてきたが、一般にセックスはより生物的であり、ジェンダーはより社会的である

6) MacKinnon, Not A Moral Issue, *supra* note 4, at 321 n 1. マッキノンは定義についてドウォーキン著前掲書『ポルノグラフィ』が重要な業績であると評価する。

7) この定義は1983年12月30日にミネアポリス市議会で可決された反ポルノ条例案の定義を少し改正したものである。しかしその条例は市長によって拒否され、再び議会に提出され、議会を通過したが1984年に再び拒否権が発動された。(Id.)

と理解される。しかしマッキノン⁸⁾は女性の条件にとつての生物学的なものの重要さとは生物学的なものの結果と考えられる社会的な意味であると理解するので、生物学的なものは両性の不平等（つまり一つの政治的な条件）の分析という目的のためのその社会的な意味として存在する。したがって彼女はセックスとジェンダーという用語を比較的取り替え可能なものとして使う傾向がある⁹⁾。

(2) ポルノグラフィに対するフェミニスト批評

(A) フェミニストから見たポルノグラフィ

ではまずフェミニストのポルノグラフィ観を見てみよう。

フェミニストの見解からすれば、ポルノグラフィは強いられたセックスの形態であり、性のレベルでの政治の実践（権力行使）であり、ジェンダーの不平等の一制度である⁹⁾。

このパースペクティブからすれば、ポルノグラフィは害のない単なる空想で

8) Id. at 322, n. 5.

9) Id. at 323. またマッキノンは男性のパースペクティブと対比させた女性のパースペクティブの意味をヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) が『見方の相違、基準の相違 (the difference of view and the difference of standard)』というときに意味させていたものに近いとしている。二人ともジェンダーの相違（性差）についての概念を生物学的なもの、本性的（自然的）なもの、超越的（理想的）なもの、実存的（現存的）なもののどれか一つを指すために使用していない。ジェンダーの社会的な体験が目安となるのでパースペクティブは基準に対応する。マッキノンはここで性差を記述的に論及せず、その起源やその含意を特定しない。その結果性差の起源やその意味するものは生物学的なもの、実存的なもの、超越的なものでもあり得ることになり、いずれにせよ固有なものであり、社会的なものではあるが、必然的なものではない。さらに「視点 (point of view)」は見方を意味しそれゆえ基準を意味し、その基準は一つの政治的な条件であるところの政治的な不平等のその力 (force) によって女性に課されたものである。

「男性的 (Male)」はここでは一つの形容詞であり、一つの社会的かつ政治的な観念であり、生物学的な属性ではない。それは誕生という条件によって社会的に授けられた人の地位である。マッキノンがそれを使うとき「男性的」は固有の性質にも、前実存性にも、自然さにも、不可避性にもあるいはそのような身体にも少しも関係しない。「男性的」は我々がそのもとで生活するシステムにおいて男性が「男性的」であるのに都合がいい（「男性的」が力強いという意味だけではなく人間的という意味でもある）ので男性はそこから報酬を受けることをほとんど疑問に思わないしそれが一つの地位であることをまったく理解しない (Id. at 323, n. 6.)。

もなければ、別の場面では自然で健康的なセクシュアリティを、墮落した混乱した形で誤り呈示したものでもない。ポルノグラフィが参与する強姦や売春とともに、ポルノグラフィは男性の優越性というセクシュアリティを制度化し、¹⁰⁾ そのようなセクシュアリティは支配と服従のエロス化 (erotization) と男女から成る社会的な構築物を一体化する。その結果ジェンダー (社会的な性差) はセクシュアル(生物的な性差的)である。ポルノグラフィはそのようなセクシュアリティの意味を組み立てる。男性は女性とはこういう人だと思ふそのような人として女性を扱う。ポルノグラフィはそのような人とはどんな人かを構築する。女性に対する男性の権力 (power) とは女性に対する男性の見方が女性とはどんな人かを定義することを意味する¹⁰⁾。

したがってポルノグラフィの中では女性は強奪や虐待を欲する。男性つまり女性の口に言葉 (その他のものも) を押し込むことのできる男性は女性がただ無性に縛られ、連打され、拷問され、屈辱を与えられ、殺されたがっているシーンを創り出す。言い換えれば女性は単に利用され使用される (taken and used)。このことは男性の視点にとってエロティックである。支配されること (Subjection)、しかも恍惚とした状態で自己決定を放棄したかたちで支配されることは、女性の性的な欲求の内容であり、また望ましいことである。スクリーンにおいてにしろカメラやペンによるにしろそれを見る人のために、女性はそこでは侵害され所有されなければならない、男性は彼女たちを侵害し所有するはずである¹¹⁾。

(B) 自由主義者から見たポルノグラフィ

それに対して自由主義の立場からみるとポルノグラフィはどのように映るのだろうか。マッキノンによれば自由主義に止まるかぎり、このようなポルノグラフィに賛成も反対もできる。ポルノグラフィに対して批判的なある論者の見解ではポルノグラフィは自然な健康的なエロスを歪めるが、しかしその強いられた人工的な覆いの下で自然で健康的なエロスはかつてもあったし、いまでも

10) Id. at 325-26.

11) Id. at 326.

あると考えられる。ポルノグラフィはエロスを誤解し誤ったイメージを持つものである。したがって自由主義者は現実がどのように見えるかという点で異論を唱えるが、ポルノグラフィが女性の実生活に強いる現実について批評できない。なぜなら現実中存在するのはポルノグラフィと継ぎ目一つなく一致する女性たちの生活であり、その結果ポルノグラフィは現実を写す鏡にすぎないと言われることによって確実に擁護されるからである¹²⁾。

(C) ドウウォーキンとのフェミニスト分析

他方マッキノンはドウウォーキンの考えを紹介するという形でフェミニストの考えをさらに説明する。フェミニストにとって男性支配は、墮落していない本質的な性的なもののその不変の基層を覆う単なる覆いではない。セクシュアリティはその底辺まで完全にジェンダー化された社会的構築物である。ポルノグラフィはその男性支配の実践を構成する中核である。ジェンダーはジェンダーが意味するものであり、ジェンダーは社会的な現実に基づき持つ。セクシュアリティに男性優越主義の意味を与える過程とはジェンダーの不平等が社会的に実在性または現実性を持つ過程であり、つまりポルノグラフィが商品として売られ、ほとんどが男性であるその消費者によって消費される過程である¹³⁾。

(D) 自由主義者とフェミニストの理解の相違

したがってこの二つの立場を対比するとつぎのようになる。

自由主義者にとっての性的な解放はフェミニストにとって男性の性的な攻撃を許すことを意味し、力と性的テロリズムを擁護するだけでなく、女性の従属を擁護することである。自由主義者にとって愛やロマンスと思えるものはフェミニストにとって強い嫌悪や拷問に非常に似ており、自由主義者にとっての快楽とエロティシズムはフェミニストにとって侵害行為 (violation) である。自由主義者にとっての欲望 (Desire) は支配と服従への願望の役を演じ、女性たちが性的に利用されることつまり受け身の立場に置かれること (許されたあ

12) Id. at 326.

13) Id. at 326-27.

の演技「命令して」とせがむこと)の攻撃され易さは女性たちを被害者にすることを意味する。自由主義者にとってのポルノグラフィの中の空想はフェミニストにとってはイデオロギーの表明であり、自由主義者にとっての自然な肉体美の賛辞はフェミニストにとって物化(人間を物扱いすること)である¹⁴⁾。

(E) 再びフェミニスト分析

通常ポルノグラフィを消費する男性の体験は空想、シュミレーション、カタルシスであると考えられるが、フェミニストから見ればそれは性的な現実である。それは実際の女性が何かされることを必要とせず、その消費の過程が女性にシステムティックに危害を加えていることを調査するまでもなく、ポルノグラフィがその消費者の望むものを提供する方法つまり観察者のように性的な場面を客観的に呈示するという方法(ポルノグラフィの美学)が、その体験が性的な現実であることの証拠となる。なぜ客観的に呈示されたセックスを観察することがそれを読み見ている男性に彼自身のセクシュアリティを体験させるのか。その理由は社会的には(資本主義の論理を通り)男性のエロティシズムは「観察されるもの」だからである¹⁵⁾。

物化の過程が社会過程(つまり一つの認知上の態度が一つの社会権力形態へと具体化する過程)であるような認識論上の立場が客観性であるとき、ほとんどの男性が性交可能な描写は現実の極めて詳細な客観的な再呈示となる。ポルノグラフィはその接近利用可能な性的対象を創り出し、その性的対象の所有と消費が男性のセクシュアリティであり、その性的対象として所有され消費されることが女性のセクシュアリティとなる。

したがって露骨さをエスカレートしながら包み隠さぬさま(candor)の境界を越えることがポルノグラフィの美学であるその理由は、その表現物が物化されたセックスを描写するからではなく、物としての女性にしかエロティシズムを感じない男性のセクシュアリティつまり性的対象の所有と消費という体験をその表現物が創り出すからである。男性は一人の女性に対して抱く自らのイメ

14) Id. at 327.

15) Id. at 327-28.

ージとセックスをする。つまりセックスは媒介となり芸術と生活を成立させる。生活と芸術は互いに模倣しないが、セクシュアリティにおいて生活は芸術となり芸術は生活となる¹⁶⁾。

(3) 猥褻法理に対するフェミニスト批評

(A) 猥褻法理とフェミニスト批評の相違

猥褻に関する法理はフェミニスト批評とまったく異なる。猥褻法理はその道徳性を振りかざすことによって猥褻物を排除するが、その実ジェンダー中立を装った男性の道徳性を忍び込ませ、それに合わない猥褻物を排除するにすぎないからである。また猥褻法理は性道徳を社会に押しつけることによって猥褻物あるいは性行為自体の猥褻性を高める。なぜなら公的な領域での男性優位の性規範の創設は私的領域でのその規範の違犯を力の行使として誇示させるからである。女性に対する力の行使とともに規則に対する違犯も男性のセクシュアリティにマッチする¹⁷⁾。

(B) 猥褻法理の緩和が意味したもの

また、芸術性に対する譲歩やフロイト主義の勝利がもたらした性表現の解禁は、押しつけられた男性の道徳性からの解放を意味しない。それはそれまでの私的な領域での原則が公認されたことを意味するだけである。つまり、性表現についての公的な禁止と私的な領域での消費の公認である。しかも押しつけられた規範のその喪失によって性のタブー性が希薄化されたために、男性のセクシュアリティには不可欠な「力の行使」を誇示するため、より多くの獣性、暴力を性の領域に持ち込むことになり、その暴力は、弱いものつまり女性に向けられることを意味する。その私的な領域での性的な現実プライバシーとして公認される。女性はますます使用されることになり、それは女性がますます男性の道徳性のもとに置かれることを意味する。猥褻法理はジェンダー中立を

16) Id. at 328-29. ボルノグラフィの美学の説明にはドウォーキン著前掲書『ボルノグラフィ』74-109頁参照。

17) Id. at 329-30.

装った道徳のもとで、女性にとって損害的な表現物を道徳に適っているとみなし、フェミニストにとって相対的には害のない表現物を不道徳と理解する。猥褻法理は男性支配に寄与する¹⁸⁾。

(C) 猥褻の定義の分析

マッキノンにはさらに具体的に猥褻の定義の分析を行なっている。1973年の *Miller v. California*, 413 U. S. 15 において連邦最高裁は猥褻を法的に過ぎるように定義した。猥褻な表現とは (1) その時代のコミュニティの基準を適用する通常人が全体として理解したときに好色的なインタレストに訴えると理解されるものであり, (2) 適用可能な州法によってとくに定義された性的な行為を明らかに不快感を与える仕方で描写し記述したものであり, (3) 全体として見た場合に真面目な文学的, 芸術的, 政治的, 科学的な価値を欠いているものを意味する¹⁹⁾。

フェミニストの立場からすれば、「通常人」という基準には、ジェンダー中立的な通常人が果たして存在するかという疑問が投げられ、「好色的なインタレスト」という基準には、なぜ権力のあるなしではなく好色さが計算に入れられ、女性が搾取されること以上に感受性 (Sensibilities) が保護されるかという疑問が、「性的な行為」という基準には、強姦も性交も区別できない州法体系にポルノグラフィとそれ以外のものを区別することをなぜ任せられるかという疑問が、そして最後に「全体性」という基準には、既存の受け入れられている価値基準が性表現を取り巻く状況を正当化すればするほど女性への危害は増大するのではないかという疑問が提示される。以上の連邦最高裁の猥褻の定義のどの部分もフェミニストからすれば、ポルノグラフィが女性の問題であるということをまったく理解していない²⁰⁾。

(D) 猥褻の定義に関するさらに詳しいフェミニスト分析

18) Id. at 230-32.

19) Id. at 332.

20) Id. at 332-33.

マッキノン²¹⁾はさらに分析を深める。「好色的なインタレスト」に訴えるということの意味は端的に言えばある男の性器を勃起させることである。この猥褻の定義の中心に不明確性があることによって男性同士が権力関係として対置することは回避され、女性を敵とする男性間の協約を可能にする。したがって「好色的インタレスト」とは男性同士の同盟関係を示すサインである。そしてそれは女性以外のあらゆるものの子供、他の男性、女性を伴った女性、物、動物一を敵とする同盟でないことを意味せず、男性がそれらに接近利用するシステムも現実である。「ときどき私はつぎのように思う。猥褻であると最終的に理解されるものは連邦最高裁を興奮させないものかあるいは希なことであるが彼らに憎悪を抱かせるものではないかと思う、なぜなら強い憎悪はエロス化されるからである。またつぎのように思うときもある。猥褻なものとは権力をもっている者が無視できると思っている男性を興奮させるものであると。またあるときはつぎのようにも思う。猥褻のその一部は、男性にとって猥褻と思えるものが、たとえ一瞬でも自分自身を男性の性的な攻撃の可能なターゲットであると思わせるものであると。さらに私はつぎのように思うときがある。真の争点は、男性のセクシュアリティがどのように呈示されるかであり、その結果あらゆるものが女性に対してなされ得るが、猥褻は男性のセクシュアリティを悪く見せるセックスであると²¹⁾。」

(E) 線引きの難しさとフェミニストの全体性

また、フェミニストの観点からすれば、猥褻物と他の表現物との線引きの難しさはフェミニストの全体性を示唆する。「文学または芸術を、物化の一つの背景や一つの基準に対立したものとして識別することが難しいのと同じように、性的な自由を性的な強制の一つの背景や一つの基準に対立したものとして識別することは難しい。だがこのことはその区別ができないことを意味しない。それが意味するものは、法的な基準がその基本的な争点—ジェンダーの不平等—に直接的に取り組むまで実際には実効可能ではなく、この問題を解決するというよりも再生産してしまうであろうということである²²⁾。」

21) Id. at 333-34.

(F) ポルノグラフィはクイントエッセンシャルな社会的行為

フェミニストによれば、ポルノグラフィは聴衆の悪いマナー、貧しい選択なのではない。それは猥褻の方である。猥褻は一つ思想であり、思想としてのその害は反社会的な行為を引き出すことである。それに対してポルノグラフィは人種差別的な分離行為 (segregation) が思想ではないと言えるならばそれと同様に思想ではない。その意味でポルノグラフィは思想であることを越えて、その実践である。それは性差別主義の社会秩序に不可欠なもの(essence)、性差別主義的な社会秩序の濃縮され純化された (quintessential) 社会的に遂行される行為 (social act) である。またマッキノン²²⁾は猥褻表現は言論でないという法的擬制が、ポルノグラフィの害悪発生の社会的なメカニズム (因果関係) に判断をくだす必要を回避させてきたとも指摘している²³⁾。

(G) ポルノグラフィの害悪が見えにくい理由

マッキノンはポルノグラフィの害悪がなぜ見えにくくなるかを説明する。ポルノグラフィは男性の優越性の一つの行為であり、その行為の持つ害悪がポルノグラフィの害悪である。しかし現実にはポルノグラフィが広く普及し世界をポルノグラフィ的な場所にうまく作り変えているためにわれわれにはその害悪を理解することが難しい。とくにその害悪は客観的な観点から理解し難い。「なぜならばその多くが『現在あるもの』であるからである。女性はポルノグラフィが作り出した世間 (world) で生活する。我々は現実としてそのうそ (lie) の中を生きる。ナオミ・シェーマン (Naomi Scheman) が指摘したように『うそは、我々が生きてきたものであり、単に我々が言ってきたものではない。現実であるものとの適合=対応関係 (correspondence) についてのどんな語りも、我々がその真理をそのうそから区別できるようにはしない。』つまりその争点は、ポルノグラフィの害悪が何であるかではなく、ポルノグラフィの害悪が見えるようになるのはどのようにしてかである。何と比較するときか。ポル

22) Id. at 334-35.

23) Id. at 335.

ノグラフィが社会的現実をうまく構築するかぎり、ポルノグラフィは害悪として見えなくなる²⁴⁾。」

(H) 害悪を見えなくする修正第一条の法理の諸前提

自由主義、修正第一条の法理の諸前提自体もその害悪を捉え難くする。その害悪は言論の自由を規定する修正第一条の通常の法理の外で定義され、言論の自由の持つ諸価値の外で定義される。

第一に国家形態へと組み立てられる社会権力の領域と私的な権利の間に区切り線を引く公私の区分は私的な領域でも性差別主義的な社会権力によって侵害される女性の状況を無視する²⁵⁾。

第二に自由放任主義はヒエラルキーのある社会では真理発見のためにならない。「自由放任主義はヒエラルキーのない社会における認識には適した、社会的な必須条件に関わる理論であるかもしれない。だがジェンダーの不平等のある社会では優勢なもの (the powerful) の言論はその見解を世間に刻印し、しかも他者が同意しているという見せかけを提供し、かつ抗議の声を聞き取れないもの、減多にないものにするあきらめの黙従のもとで、権力がないという真理を見えなくする。ポルノグラフィは女性をでっちあげ創ることができる。なぜならポルノグラフィはそのヴィジョンを現実にする権力を持っており、そのときポルノグラフィは客観的には真理といっても通用するからである²⁶⁾。」

第三に言論がそれ自体目的であり他の目標に仕えないという前提は、その他の目標の中に女性の言論の自由という目標も入れる。女性が男性の言論 (ポルノグラフィ) によって沈黙を強いられていることなど理解されない。「修正第一条の法理は表現の自由が抽象的には一つのシステムであると理解するが、性差別主義を (そして人種差別主義も) 具体的にはシステムであると理解しない。沈黙は雄弁ではないので、ポルノグラフィが女性の表現行為を萎縮することを経験的に具体的に示すのは難しい。だがポルノグラフィ弾圧が正統な言論

24) Id. at 335-36.

25) Id. at 336.

26) Id. at 337.

を萎縮させるという主張もそれ以上の信憑性を以てポルノグラフィの保護を支持してきたわけではない²⁷⁾。」

第四に修正第一条の法理は害悪の存在を証明するためには「ジョンがメリーを殴る」というような意味での、同一証明可能な個人に被害が生じかつ加害行為と被害との線条的な因果関係の存在を必須と考えるが、このことは特殊な害悪の性質に対応したがるなことを意味する。訓練された護身用の犬に「殺せ」というとき、その犬に対応するのが男性であり、殺せと命令し調教する主人がポルノグラフィに対応する²⁸⁾。

第五に裁判所は性表現を禁止する場合にポルノグラフィの中の演技が実際の誰かの生活であるという点を考慮に入れるが、その誰かには子供だけが入り、女性も人間扱いされずにポルノグラフィ的な演技をするように強要されていることが分かっているにもかかわらず、その点で成人の女性の現実の生活は考慮されない。性表現はそれを見たくない人、見なければならぬ状態に置かれる人、判断力の未熟な幼い子供、快適な住環境を維持したいと望む近隣の人々のインタレストという点で規制されるが、性的な強制力が通常向けられる女性に及ぼす影響については政策的な争点とはならない。その理由は性的な強制力を女性に加えることはセックスを呼び起こすと理解されるからである。しかし「連邦最高裁や委員会や立法者や研究者は、ポルノグラフィの（男性の）消費者のマインドという点、『社会』という点、『反社会的な』行為と猥褻法理の緩和化との経験的な相関関係という点で、ポルノグラフィが及ぼす危害についておおた実りのない調査を行ってきた」が、その反面「過去の数年までの経験的な調査はポルノグラフィ的な刺激が女性に対する性的な攻撃（aggression）を促進するかどうかという問題やあるいは暴力が性的な刺激となるかあるいは性的な後遺症を残すかという問題に決してアプローチしてこなかった。ここ数か月においてのみ我々は通常の支配＝服従を表すいわゆる合意上のセックスの描写が女性に及ぼす影響を学習し始めたところである。女性だけのヌードのインパクト、異常なしつこさ（penetration）のような特定の行為の描写のイン

27) Id.

28) Id. at 337-39.

バクト, さらにジェンダーの不平等という社会的なコンテクストのもとでの相互的なセックス (mutual sex) のインパクトについてさえもわれわれはいまだに知らない²⁹⁾。」

最後に修正第一条の法理に横たわるもっとも基本的なものは, 国家の介入の前には自由な言論がすでにあるという前提であり, 社会のどんな階層に属する者も社会的にシステムの沈黙を強いられるはずがないと想定しがちなことである。しかし「女性にとって言論の自由に関する差し迫った争点は, 前述したような国家介入をまずなによりも避けるということではなく, 言論の自由を否定されてきた人々が言論に接近利用できる機会を持てるような積極的な手段を見つけたすことである³⁰⁾。」

(4) 非人間化批評と暴力性批評の限界

(A) 非人間化批評の限界

マッキノン³¹⁾は, ボルノグラフィが屈辱的, 好色的であるという批判を越えて, 「非人間化する (dehumanizing)」という批評はボルノグラフィの害悪を記述する一つの試みであると理解する。しかしその批評は, 「人間 (human being)」という言葉の多義性のうえに打ち建てられた個性性=一人の人間であること (personhood) の持つ道徳的な意味の不十分さを反映し, したがってその種の批評も不十分であると理解する。またあるフェミニストの立場からもボルノグラフィはつぎのように批判される。それは文化的に特定化された経験的には記述的な一自由主義的な道徳ではなく一意味において女性を非人間化すると理解され, 女性は同様の行為において男性が持つ権利つまりセックスすなわちジェンダーを定義する権力を奪われる³¹⁾。

マッキノンは, 人間は道具ではなく目的であり権利の束であると理解するカント (I. Kant), 資本主義社会のもとでの個人は財産所有者であり女性は男性

29) Id. 339-40.

30) Id. at 340.

31) Id. at 340-41.

の個性を表す財産となると理解するマルクス (Karl Marx), 自己同一性が間断のない幻覚であり人は感覚の束であると理解するヒューム (D. Hume) などの個人観を検討し, たとえばヒュームのそれではポルノグラフィ批判が成り立たないことなどその意義と限界を指摘する³²⁾。

その中にバーナード・ウィリアムズ (Bernard Williams) の個人観の検討もある。彼はウィリアムズ委員会という名で知られる1979年のイギリスの「猥褻性・映画検閲に関する委員会」の中心人物であり, 著名な言語哲学者である。彼にとって人とは通常自尊心に価値を見だし, かつ苦痛を感じる主体である。そして自我がどのように定義されるか, 何を重視するか, 何を苦痛として感じるかは文化によって変化し, 非歴史的なものとしての尊重や不変的なもの, 一様に否定的なものとしての苦痛の社会的な意味を想定する必要はなく, 人間らしいと思えるかぎり, 痛みを快楽とすることも尊重すべきであり, ポルノグラフィが, 屈辱を与える行為や拷問をエロス化することも許すべきことになる³³⁾。

しかしマッキノンはこの考えに対してつぎのようにコメントする。人間に屈辱を与える行為がどのように社会的に定義されようとも, ポルノグラフィの中で屈辱を受ける相手が性別はどうあれ「ガール」であるように, 男性の視点からすればその行為は性的に刺激するものである。エロティックなものが非人間化するものと同一視されるように女性もポルノグラフィと同一化する³⁴⁾。

(B) 暴力性批評の限界

強姦とともにポルノグラフィを性的なものとしてではなく暴力的なものとして理解しその非人間性を批判する見解がある。しかしマッキノンは, 一般に理解されている同意によるセックスと, 暴力が不可分一体であることを認めるため, セックスあるいはその表現の異常な形態として強姦あるいはポルノグラフィを理解しその暴力性だけを取り出し, 他の性的でない暴力と同一次元に置き

32) Id. at 341-42.

33) Id. at 342-43.

34) Id. at 343.

その非人間性を告発することは現実のセックスの客観的な事実に基づき、性の問題から逃避することであると理解する。「強姦についていえば、暴力を表現しているように見える一方でそこでの争点は暴力の存否ではなく、強制と明確に区別されるものとしてのセックスとは何かであり、ポルノグラフィの問題は、女性の服従と明確に区別されるものとしてのエロティシズムとは何かである。これはレトリック上の問題ではない。男性の支配のもとでは一人の男を性的に刺激するどんなものもセックスである。ポルノグラフィの中で暴力(violence)はセックスである。その不平等がセックスである。ポルノグラフィは性的にはヒエラルキーなしでは働かない。もし不平等、暴力行為 (violation)、支配、強制力 (force) が一切ないならば、性的な刺激は一切存在しない。猥褻法理は『好色的なインタレスト』というジェンダー-中立的な羞恥心の持つその抽象性のもとでこのポルノグラフィの中心的なダイナミクスを曇らせることによってポルノグラフィ業者たちの真の頼みを聞いてきたのである。また猥褻法理はその法理が包囲すると思われるどんなものに対しても国家の禁止という支配のインタレストを付け加える³⁵⁾。」

女性の観点からすれば、強制されたセックスを拒否するために必要な研究とは、一切の批評がなく一切の他の選択肢も許されず、その規範からの少しの逸脱も許されない状況のもとでは自然であり、自己充実であり、エロティックであると両性が習ってきた同じ行為によって女性が侵害される体験を研究することである³⁶⁾。

マッキノンとは、最後に非人間化批評と暴力性批評をつぎのように批判する。「それらの批評は有益であり、ある程度まで脱構築的であるが、セクシュアリティにおけるポルノグラフィの位置や、女性の定義及び地位に関する構築物におけるセクシュアリティの位置というより深い問題を回避する。なぜならばその諸批評はあたかも女性が解釈によって『人 (persons)』であり得るかのよう振る舞い、その『人』の観念が、あらゆる社会的な現実的な方法で男性によって男性の観点から定義され、男性のために用意されていないかのように振

35) Id. at 343-44.

36) Id. at 344.

る舞い、さらにセクシュアリティが男性の権力の一つの構造自体ではないかのように振る舞うからである。そうすることはポルノグラフィが存在しなかったかあるいは無力であったかのように振る舞うことである。男女双方の見地から見て、個性（一人の人間であること）の問題や暴力の問題よりも深い問題はポルノグラフィが女性とセックスを構築化したり、『女性』とは何を意味するかを定義したり、セクシュアリティとは何かを定義したりするときに使う社会的な因果関係のメカニズムの問題である³⁷⁾。」

マッキノンはこの論文の最後をつぎのように結んでいる。「つまり猥褻に関する法理はすでに存在するもののイメージを反映しただけだと称する一方で、鏡であると称する地図であり、正統化であり、権威づけであり、人が社会の現実に関与する一組の方向であり、人を導く統制である。ポルノグラフィは空想、幻想または思想としての観を呈し、それが正しいときは善でありそれがまちがっていけば悪である一方で、そのようなものであるからこそそれは現実に正確に権力を配分する。自由主義的な道徳観は現実を構成する幻想を扱うことができない。なぜならばその現実についての理論は社会権力の配分について実質的な批評を欠き、経験世界の背後に隠れた対応関係 (correspondence) によって真理を手に入れることができないからである。表面 (surface) ではポルノグラフィと猥褻法理はセックスに関わる。実際面 (face) では女性の地位が問題になっている³⁸⁾。」

II ある懷疑主義者のマッキノン批判

(1) 懷疑主義の言論の自由の原理論

以上のようにマッキノンはポルノグラフィが男性支配を制度化する本局であるという理解に立ち、表現の自由の領域におけるジェンダー批評の不在を暴き、その結果女性の強い沈黙と自由主義の限界が明らかになったと自称

37) Id. at 344-45.

38) Id. at 345.

する。

それに対してここで紹介するゲイ(Steven G. Gey)によるマッキノン批判は彼の『弾圧の弁明: 行為としてまたは思想としてのポルノグラフィに対する規制』と題する論文の一章に相当する。その中の「フェミニストの検閲者たち³⁹⁾」と題する章において彼はほとんどマッキノンの見解だけに焦点を当て議論を展開している。その前の二章は連邦最高裁の猥褻に関する判決とそれを支えたアカデミックな理論の関係を説明し、検討するものであり、その理論の一つとしてマッキノンの見解も位置づけられる。

彼はまたその論文の中で言論の自由をなぜ保護すべきかの理由を述べている。彼のマッキノン批判をできるかぎり誤解しないためにも彼の原理論を知っておくことは無駄ではないであろう。マッキノン批判に入るまえに彼の原理論を要約しておくことにする。

彼は自らの立場を革新的な懐疑主義と呼ぶ。しかしこれは「人間が真理または現実を認識できる可能性についての深い疑いあるいは完全な絶望」という意味での懐疑主義ではない。道徳上の真理や政治的な判断の真理に限った懐疑であり、物理的な法則性に従った経験的な判断に対する信頼と両立する。そこから出てくる命題は、政治的な変化は不可避であり、我々は必ずしももっとも道徳的な世界に住んでいるわけではないというものである。すべての理論は仮設的であり、間断のない修正を受け入れる必要がある。標語で表現すれば「結局

39) Steven G. Gey, *The Apologetics of Suppression; The Regulation of Pornography as Act and Idea*, 86 Mich. L. Rev. 1564, 1596-1612 (1988). だがこの論文はそれだけに止まらず、寛容モデルと呼ばれる言論の自由の理論の一群を批判する。ゲイの理解によれば、この寛容モデルはホームズ主義的な懐疑主義とは対照的な立場であり、信頼できる最良の道徳を認識できるという前提に立ち、その道徳的な確信を基礎に言論の自由の原理論を構築し、言論が国家の判断によってある積極的な機能、価値に仕えることを認めるものである。したがってゲイはこのモデルがポルノグラフィ規制を促す近年の努力と直接結びつくと考える。なぜならこのモデルは言論の自由の領域において道徳原理に依拠することを払拭できなかった伝統的な自由主義と道徳的な多数者が支持する道徳原理を国家によって執行しようと狙う保守主義の双方にとって好都合だからである。私は彼の寛容モデル批判に興味を持つが、残念なことにもっとも啓発的な寛容モデルと私が考えるポリンジャーの理論に対する突っ込んだ分析がほとんどなされていない。他の寛容モデルに対する批判は有意義であり、寛容モデルが陥りがちな誤りをよく突いていると思われる。

我々はまちがっているのかもしれない」である⁴⁰⁾。

したがって彼の懐疑主義は、道徳的な価値は認識できるはずだという粘り強い楽観主義と対立し、道徳的にもっとも信頼の置ける主張を否認し、その道徳的な不確かさを歴史的な展開の不可避的な結果として受け入れ、その不確かさからくる恐怖に堪えながら、それに代わり歴史の進歩を信ずる。国家とは諸個人が共同の行為に自由に参加することによって彼らの利益を保証し実現するための諸個人の創造物ではなく、完全な人間による認識を直接的に体現したものであるかのように扱うべきでもない。個人が歴史を創るのではなく、歴史が個人を創るのであり、共同的なものが個人に先立ち、たとえ個人が正しい道徳的な認識を手に入れることができるとしても、共同的なものは、いかなる道徳的な認識とも両立しない非道徳的な政治的な力関係によって導かれるものである。したがって偽なる思想の猛攻から真なる思想を保護するための国家によるいかなる規制も、制度的な自己永続化という第一目標に仕えるだけであり、その偽なる思想が偽である証拠は規制の側の自己正当化の論理（循環論法）によってつまりその思想と対立する原理（思想）との比較によって証明されるだけである⁴¹⁾。

以上の彼の立場は彼に後期のホームズ (W. Holmes) の立場を支持させる。道徳的な真理とは歴史的な必要の産物である。対抗するインタレスト間での継続的な衝突は不可避であり、政治的な変化も所与である。このような騒がしい領域では自由な言論は自然な現象となる。修正第一条の意味は人間の所業の短命さとどんな政府も歴史的な諸力の不変の展開を妨げ得ないことを考慮して解釈されねばならない。それゆえ皮肉なことにこの懐疑主義の立場からすれば、表現の自由はそれが政治的な活動や心理的な福利のもっとも意義のあるその一部であるという理由から保護されるのではなく、表現の自由は基本的に意義がなく、それに内実を与える歴史的な諸力の単なる影でしかないという理由で強い保護が与えられる。しかしこのことは表現に価値がないことを意味しない。政治的な変化が不可避である以上表現の自由はそれを平和的に行なう手段

40) Id. at 1622-23.

41) Id. at 1623-25.

を提供する。革新的な政治的な思想の表現を許すべきであるという主張はこの機能に仕えるものである⁴²⁾。

したがって修正第一条はつぎのように定義される。「中世的な宗教的な理論から科学的懷疑主義に基礎づけられた近代的な理論に向かう社会思想運動一般の一宣言として捉えるべきである。⁴³⁾」あるいはまたつぎのように定義される。「既存の政治的な社会的な秩序にとってのもう一つの支え」ではなく、「自然な政治的な展開を促進するように意図された一つのマシーン」である⁴⁴⁾。

以上のような道徳懷疑主義の立場から彼は国家がポルノグラフィを規制するために依拠できるどんな道徳原理も存在しないという立場に立つ。ポルノグラフィは社会的に逸脱した言論の範疇に入り、そのような言論も体制批判、因習破壊というメッセージを伝達するという意味で価値がある。さらにポルノグラフィ規制を認めることは他の社会的に逸脱した言論を規制することになる。

(2) マッキノンのフェミニスト批評に対する評価

以上の懷疑主義の立場からすればマッキノンのフェミニスト批評はどのように評価されるのだろうか。

(A) 他の規制擁護論との共通点

ゲイによればポルノグラフィへの攻撃方法という点でのマッキノンの新しさは彼女のアプローチの観念的な基礎と、ポルノグラフィ検閲に好意的な伝統的な理論との間の重大な類似性を覆い隠すことである。ゲイによれば、伝統的な規制擁護論とフェミニスト批評が共通する点はずぎの四点である。第一にセックスという行為とそれを表現する性表現との重要な法的な相違をまったく理解しないことである。第二にポルノグラフィ的な表現物に言論の自由の保障を単純に与えるべきでないと理解することである。第三に比較的過激な保守主義と

42) Id. at 1625-26.

43) Id. at 1565.

44) Id. at 1622.

もに性的に明示的な言論を規制する政府の権限を芸術的な表現にも拡張することである。第四により広い範囲の表現領域を射程に入れたマッキノンの理論は保守主義の理論が陥る失敗を分け持つことである。つまり、ポルノグラフィ規制擁護のための彼女の努力は道徳原理のために念入りに作られた弁明以外の何ものでもないことになる⁴⁵⁾。

(B) 他の規制擁護論との相違点

またゲイはマッキノンの見解とこれまでの伝統的な規制擁護論との相違をつぎのようにあげている。第一にもっとも違う点はポルノグラフィを統制する動機である。保守主義者はあらゆる性表現に敵意を示すが、マッキノンは女性を巻き込んだ性表現に対してである。第二にポルノグラフィの何に焦点を当て敵対するかという点でこれまでの論者と異なる。たとえばアメリカのアカデミズムの本流と理解されるある見解はポルノグラフィの没社会性（マスターベーションの助けとしてのそれ）を理由に批判的であるが、マッキノンはポルノグラフィの社会的な機能の一点に批判を集中する。第三にその社会的な機能と言ってもポルノグラフィが社会一般に蔓延する性的不平等を反映しその結果として生じる社会的な機能（害悪）だけではなく、不平等をポルノグラフィ自体が創り出しているという主張である。そのことは道徳原理に依拠せずにポルノグラフィを糾弾する機会を彼女に与えることになる。第四に、彼女はその道徳原理に代わって害悪原理に基づきポルノグラフィ規制の正当化を試みる⁴⁶⁾。

ゲイによれば、マッキノンはポルノグラフィがもたらす三つの害悪を説明している。ゲイはそのそれぞれの害悪の説明がどれほど説得的であるかを検討するが、とくに最後の害悪に猛攻撃を加えている。その害悪は、マッキノンのライトモチーフに関わり、ポルノグラフィが単に社会の差別の反映ではなく、それ自体差別の形態であり、差別の元凶であり、原動力であるというものである。ゲイはこの主張が寄って立つところの理論上の諸問題を指摘し、さらに全体として女性差別の問題を解決する方法としてマッキノンが選択した公的な機関に

45) Id. at 1597-98.

46) Id. at 1598.

よるポルノグラフィ規制という戦術が、現実の政治的な動態、力関係の中でどのような波紋を引き起し、その当初の目的とはかけ離れた結果をもたらすかを論じている。

(3) ポルノグラフィ製作過程に関与する女性が被る害悪

第一の害悪はポルノグラフィ製作の過程に関与した女性が現実にはポルノグラフィ的な演技を無理やり強要されるという害悪であり、特定の女性に対する直接的な害悪を意味する⁴⁷⁾。

しかしゲイは、この害悪の防止のためにポルノグラフィを規制するという解決策は見当違いであると理解する。なぜならば誘拐罪のような刑事上の制裁や不法行為に対する民事上の制裁を加えるなど他の救済手段が存在するからである⁴⁸⁾。

またその既存の法的な救済手段では彼女たちを救済することができないという主張がマッキノンの主張の延長線上にあるが、かりにこれらの法律を厳しく適用すべきであるとしても、彼女たちの真の問題はポルノグラフィを禁止することでは解決されない。マッキノンも指摘しているように彼女たちは一般に教育を受けていないか、あるいは生命の危険はないにしろ虐待的な家庭環境から逃げだしてきた貧しい若い女性である場合が多く、ポルノグラフィを禁止することは彼女たちがその体を売り物にする他の多くの機会を残したまま、その機会のうちの一つを彼女たちからとりあげることを意味するだけである。したがってマッキノンの解決策は彼女たちの差し迫った害悪に取り組むためには必要でもなければ十分でもないことになる⁴⁹⁾。

(4) ポルノグラフィの普及によって全女性が直接被る害悪

(A) 害悪原理と道徳原理

47) Id. at 1599.

48) Id. at 1599-1600.

49) Id. at 1600.

この害悪は性的に明示的な書籍の配布及び映画の配給の結果としてその社会の全女性が直接的に男性の性的な支配の下に置かれるという害悪である。つまり女性たちが強姦、痴漢などの性暴力を受けるのはポルノグラフィの普及が原因であるというものである⁵⁰⁾。

この害悪の存在がいまだ誰にも立証されていないことを検討するために、ゲイは、マッキノンの影響を受けたと思われる1986年の司法長官のポルノグラフィ委員会が提出した報告書を取り上げる。同委員会は性的に明示的な表現物を四つに分類し、(1)性的に暴力的なもの、(2)品位を落としめること、支配、従属、屈辱を描写した非暴力的なもの、(3)非暴力で、品位を落としめないもの、(4)ヌードである。この前の二つは有害であり、三番目が委員会で議論になり、その表現物の使われる目的、状況に応じて有害となると判断され、最後のヌードだけが相対的には害がないものとみなされた。この害悪分析に向う変化はマッキノンの影響であり、とくに二番目の害悪の定義がそれをよく示している⁵¹⁾。

この委員会は害悪の広い定義を採用し、個人に害悪が生じることとは無関係にコミュニティや組織や集団も害悪を被ることを公言し、そのとき委員会は思わず道徳原理を導き入れたとゲイによって指摘されている。さらに委員会は先にあげた表現物に男性がさらされることが女性に対する敵対的な性的暴力へと男性を導くという因果関係が立証されたと主張した。しかしそれは経験的なデータに基づいたものではなく、われわれの常識に沿った包括的な害悪の定義に依拠してであった⁵²⁾。

ゲイによれば委員会がどんなに害悪原理に依拠し装ったとしても、その害悪が市民の態度や世界観に関わる以上、それに対する国家規制を行なうことが不可欠であり、その政策を実現するためには国家が道徳原理に依拠することは避けられず、いくら害悪原理でカムフラージュしても道徳原理を導き入れることになる⁵³⁾。

そしてゲイはポルノグラフィとその消費者の態度の否定的な発達との経験的

50) Id.

51) Id. at 1600-1.

52) Id. at 1601-2.

53) Id. at 1602-3.

な因果関係が存在しないことを委員会よりも率直にマッキノンが認めていると指摘し、社会科学がその因果関係を立証できないことに苛立つマッキノンが害悪発生の立証要件としての厳格な因果関係自体を攻撃していると、理解する⁵⁴⁾。

(B) 芸術とポルノグラフィの区別

ゲイはこのポルノグラフィの普及がもたらす全女性に及ぼす害悪という点で芸術とポルノグラフィを区別していないことを問題にする。たしかにマッキノンはつぎのように述べている。「[も] し女性が服従させられているならば、その作品に他の価値があることをなぜ問題にしなくてはならないのか。おそらく男性のあいだで作品の価値を回復させるものは、女性に対するその作品の危害を強める。文学や芸術や科学や政治の既存の基準はフェミニストの光りに照らせばポルノグラフィのモードや意図したものやメッセージと際立って類似している。」実際にマッキノンは正直に認めているように性的な支配という既存の関係を反映した正統とされる芸術作品の保護を望んでいない⁵⁵⁾。

ゲイはこの芸術もポルノグラフィも区別しないマッキノンの見解をつぎのように特徴づける。「マッキノンの第一のターゲットは前述したようなポルノグラフィではなく、むしろポルノグラフィが体现しそれが伝達する『イデオロギー』である。女性を見下した見地から描くこれまでの芸術表現はしたがってポルノグラフィ以上にいっそう危険であると理解されねばならない。なぜなら芸術は社会的な正統性という追加されたメッセージを運ぶからである⁵⁶⁾」。

こうして、ゲイが見るところによれば、マッキノンの真の狙いは、ある種のイデオロギーであり、それを具現したどんな表現も禁止すべきことになる。そしてこのことが正しいとすれば、より多くの鑑賞者により説得的にそのイデオロギーを伝達できる社会的に認知されている芸術作品の方こそ規制されるべきことになる。「芸術は、支配することに社会的な正統性という許可 (imprimatur) を与える。芸術は『女性は従属すべきである』というその作者の唯一

54) Id. at 1603-4.

55) Id. at 1605 (なお引用部分は MacKinnon, Not A Moral Issue, supra note 4, at 332-33, 334.).

56) Id.

の見解を伝達するのではなく、『女性の従属は概して社会によって好意的に受け取られている』というよりいっそう高圧的なメッセージをも伝達する。⁵⁷⁾」

(5) ポルノグラフィが性的現実を構築することによって全女性が被る害悪

この三つ目の害悪はマッキノンが一番主張したかったものであり、彼女の仕事の中で繰り返し現われる主題である。しかしゲイにとってこの害悪は先の二つの害悪以上に問題がある。ゲイはまず彼女の言葉を引用する。「ポルノグラフィ」はとマッキノンは書く、「他のどこかで構築された現実は何らかの意味で関わる心像なのではない。それは歪められた像でもなく、反映図でもなく、投影図でもなく、表出でもなく、幻想でもなく、表象でも象徴でもない。それは性的な現実である⁵⁸⁾。」

(A) 表現の持つ力への過大評価

このマッキノンの陳述をゲイはつぎのように理解する。それはポルノグラフィが言論以上のものだと言っているという点でアメリカのアカデミズムの本流の見解と一致する。両者の見解は表現には途方もない力があると理解する。言葉やイメージは恐るべき属性を備える。それらは政治的、経済的及び社会的な構造全体を「構築すること」によって歴史を文字どおり導くことができる⁵⁹⁾。

またゲイはマッキノンのこの見解は、Abrams 事件におけるアブラムスのイデッシュ語のビラが社会にとって深刻な脅威をもたらすと信じた初期の保守主義の見解と一致すると受け取る。またその見解は上部構造と下部構造を逆転させており、表現が現実を創り出し、ポルノグラフィが社会的な不平等を創り出し、性的な不平等の第一原因、原動力であると理解している⁶⁰⁾。

57) Id. at 1606.

58) Id. (引用部分は MacKinnon, Not A Moral Issue, *supra* note 4, at 326-27.)

59) Id. at 1606-7.

(B) 宗教的な視点

マッキノン自身は現状維持に対する独自の進歩的な批評であると自称し、自由主義を越えることを提案する。さらに彼女の前任者が利用できなかった認識や洞察や態度の総合を志向するが、ゲイによれば、その試みは啓蒙運動期以前の思想であり、確信に支えられた宗教の見方である⁶¹⁾。「ポスト啓蒙運動の政治理論が一過性と変化を強調したのとは対照的に、マッキノンは決定ずみの僅かな確信を中心に循環する理論を提出する。彼女の政治的な結論は、変化しない独自の諸前提から演繹的に現れ出る。彼女は力の運動 (dynamism) に代って静止状態 (stasis) を置く。彼女は絶対的な見地から世界を記述し、しかも一切のグレイゾーンも間違える可能性も持たない。彼女は客観性を男性に特徴的なパースペクティブとして理解し、さらにその客観性に代って革新的な主観性の態度を置く。しかし彼女の提案するその革新的な主観性は外部の諸要素に関心を払わない。つまりそれはすでに決定済みであり、変化することもなく、その正当性が疑われることもない。それは通常そのような諸理論を特徴づける存在の軽やかさや変わりやすさという諸要素を欠いている。それは本質的に宗教的な視点であり、完全無欠さ、ユートピアの見方である。⁶²⁾」

(6) 女性差別という問題を解決する戦術としての不適当さ

以上のように、ゲイはマッキノンが示したと理解する害悪をことごとく否認した。第一の害悪についてポルノグラフィ規制はポルノグラフィに関与する女性の真の問題の解決策にはならないこと、第二の害悪については性暴力とポルノグラフィの因果関係は経験的な社会科学のデータからは証明できず、最終的には道徳原理に依拠しなければ認められないことが説明され、マッキノンの見解がこの性暴力への誘因という害悪の点で芸術とポルノグラフィを区別しないことが深刻な問題を生じさせることが指摘された。最終的にゲイはマッキノン

60) Id. at 1607.

61) Id. at 1607-9.

62) Id. at 1609.

のフェミニスト批評が表現に対する前近代的な理論、世界観に依拠するものであり、確信の体系であると言い切った。

つぎにゲイはマッキノンが採用したポルノグラフィ規制という戦術が女性差別という問題に取り組む際にいかに不適当なものであるかを強調する。

ゲイはポルノグラフィ規制がマッキノンの意図とは異なりその目的に反し現状維持の男性支配の道徳に資するメカニズムをつぎのように記述する。「フェミニストが反対するポルノグラフィ的なパースペクティブは、頭の切り替えができない異性である男性のパースペクティブであり、その男性は自分の持つ視野の狭い視点から社会の性的な慣習を定義し、彼の硬直した道徳上の基準からどんな逸脱したものも危険であると非難する。道徳原理は裁判所がそのようなパースペクティブを法的な事実に入れことを許す。思想を組み立てる権力にそのように強く頼ることによって一そして法を通じてそのような思想を規制する権利を要求することによって一マッキノンは過去において女性（そしてすべての政治的なアウトサイダー）のインタレストに反して決まって利用されてきたそのマシーンに暗黙のうちに好意的な判断をくだす。現在の現状維持派によって採用される絶対的な確信のフレームワークはマッキノンのようなフェミニストの検閲者たちによって記述されたフレームワークと基本的に異ならない。このようなシステムのどれもが逸脱した傾向を持つ表現を定義し排除する必要を表明する。それら道徳観の執行者たちはいつも『吐き気をもようさせ、むかつかせる』表現を探している。道徳原理に基礎づけられたシステムが抱える問題は、そのシステムが裁判官の（あるいは支配的なコミュニティの）持つ道徳的なシェーマのその信条とは無関係な理由では裁判所が吐き気をもようすことを決して正当化できないということである。そのシステムは循環的であり、その結論が自己正当化する。したがってマッキノンは道徳観と権力を区別するという点で間違いを犯している。その二つの観念は分離できない。その真の問題は権力が道徳観を支配することである。この基本的な争点から修正第一条に関わるすべてのものが現れ出る⁶³⁾。」

Ⅲ 私 見

それでは以上の議論の対立、すれちがいを手がかりにして日本のこの種の議論においてもっとも代表的であり説得的であると思われる見解を検討しながら自分の意見を述べてみたい。

(1) 奥平 説

日本の表現の自由研究の第一人者である奥平教授は、『性表現の自由』と題する書物の中で猥褻な表現物の禁止に関する国民世論の統計資料を端緒にして猥褻な表現物の禁止を正当化するさまざまな根拠を丹念に検討しその根拠の薄弱さを説明して行く⁶⁴⁾。その過程でフェミニストの活動家のボルノグラフィ規制論が検討されている。「要するに猥褻文書は女性を侮辱し、女性の品位をきずつけ、女性の人格をふみにじるもの、つまり、現にある女性差別、不平等の骨頂をなすものだ、といわれる。」さらに、このウーマン・リブ理論からすれば猥褻文書の自由化は女性侮辱の解禁であり、猥褻文書の取締りに任ずる刑法175条もじつは女性差別禁止法規にはかならない。猥褻文書は女性侮辱的、差別的なものでこの意味で道徳的に許されない。実害をもたらすかどうかという議論を待つまでもなく、道徳的に許されない性差別行為である⁶⁵⁾。

奥平教授はおよそこのようにリブの見解をまとめたうえで、この女性たちの主張が「もっとも伝統的・保守的な男性たちの唱えるところと帰一していること」が「とても面白い現象である」（124頁）と指摘する。ここにおいて奥平教授は猥褻文書が性差別的でその自由化が女性解放を阻止することになるかという疑問を提起する。

奥平教授は現状認識として現代の日本はたしかに男性優位の社会であることを認める。社会の隅々までその傾向が見られ、いろいろな文書やマス・メディアの世界でも同様であることを否定しない。しかしリブの理論の前提でもある

63) Id. 1911-12.

64) 奥平・前掲論文101-72頁。

65) 同上123頁。

この現状から出発しても猥褻だけが特別に男性優位・女性軽視的であるわけではないと切り返す。

しかもリブの理論は現実の世界で男性が示す女性に対する態度を糾弾する姿勢をそのまま猥褻文書に対しても投影していると理解する。性表現を禁止するまえになぜ男性本位の性行為そのものを性差別行為として国家的に禁止しないのかと付け加える。猥褻文書の中で女性はセックスの単なる対象として扱われ、表現の対象にされる。が、そこに登場した男性も単なる対象にすぎないという。さらにその中で女性は男性の性欲をそそるようなポーズをとらされるが、そう思うのは古風な固定的な女性像が働いて女性の尊厳がきずつけられたと感じている場合もあるからではないかと問い返す。そして結論としてわれわれにつきのように問いかける。「多くの猥褻文書が世の趨勢を反映して男性優位の思想・嗜好を反映しているのは、たしかだろうと思う。けれども、性表現文書といってもいろいろあり、それについての受けとめ方は、女性のあいだでもさまざまだと思う。そもそも性表現文書というものは、層としての女性を蔑視し、女性一般を搾取対象としている、とはなかなかいえないのではなかろうか。」(126頁)「性差別が減少し女性の社会進出が高まれば、そして、性表現の自由化も同時に進行すれば、女性の特性に合わせた性表現文書が登場してくるのではなかろうか。その場合でも、性表現文書はそもそも女性蔑視的で『女性の敵』だという本質規定を、ウーマン・リブの人たちは固執してゆずらないだろうか。」(126頁)

このウーマン・リブの理論を検討したあとで奥平教授は法律論に入り、猥褻の定義の不明確性、さらに法学者、裁判官が提示する猥褻法の法益の検討、さらに裁判所による微調整ともいべき性表現の自由化の展開を検討し、それがあたかも猥褻の真の問題であるかのように議論を矮小化させていると指摘し、道徳の領域に国家が口を出すこと自体が真の問題であると力説する。それは自主決定権、プライバシーの問題であるともいう。そしてつぎに、より巧妙な消極的なアプローチから性表現の自由に反対する立場、つまり猥褻な表現物には社会的な価値がないという立場に検討を加える。しかしこれには猥褻文書には需要があり売れる以上あるとし、表現でないという指摘は論理的ではないという。

最終的にウィリアムズ委員会の立場を支持し、禁止から限定にすべきであり、見たくない人と見たい人との配慮からなる規制の在り方を支持する。また子供との関係ではパターンリズムの原型が問われているとし、この場合年端のゆかぬ子供を道具として使う過程がポルノ製作の過程には含まれていることから、いわゆる淫行条例が支持できる以上いわゆるチャイルド・ポルノも禁止できると結論する。

(2) 奥平説の検討

以上の奥平教授の見解はマッキノンの見解に対する直接の評価であると明記されているわけではないが、そうだという前提で議論を進めさせてもらう。

奥平教授の見解は真の問題を道徳に対する国家の干渉自体であると考える点で、先に紹介したゲイの見解に非常に近いように思われる。そして私は両者のマッキノン理論に対する各々の誤解がポルノグラフィ規制の問題を女性差別の問題として掘り下げて議論することの意義を否定させ、道徳と権力の問題として片付けることを可能にさせたのでないかと理解する。

それはまず第一にポルノグラフィと猥褻の相違についての誤解である。

奥平教授は禁止されてきたあるいは禁止すべきであると主張されてきた性表現を一貫して「猥褻文書」という言葉で呼び、フェミニスト（奥平教授の表現では「ある種の女性解放家、ウーマン・リブ」）の見解を検討する段においてもフェミニストがそれを新たに定義し直したと理解する。これはマッキノンがあくまでも猥褻の概念とは異なるポルノグラフィの定義を行なった事実と反する。むしろ彼女は抽象的な猥褻法理がジェンダー中立的な装いを施した男性支配の道具（ポルノグラフィとともに）であると明確に規定したのであって、それが「女性差別禁止法規」とであるというはずはない。

性表現のうちの特定のポルノグラフィ的な表現物と猥褻な表現物を区別できないという議論はつぎの議論としてあり得るが、ポルノグラフィ規制論が即猥褻文書の取締りを正当化する議論であるかのように表現するのは議論が単に噛み合わないということとどまらず、正当な評価を不可能にするように私には思われる。その点ゲイはマッキノンの分析が道徳原理ではなく害悪原理に依拠するという理解から議論を始め、その害悪の分類、検討に向かったことはマッキノ

表現の自由と女性差別

ソの議論を正当に評価する態度であると評価できる。

第二にポルノグラフィの定義の不明確さという点でゲイは、マッキノンの理論では芸術との区別ができないと反論する。たしかにマッキノンの理論は既存の性道德の基準を反映した芸術の領域をポルノグラフィ規制の例外とはしない。しかし芸術が禁止される可能性があることは芸術が実際に禁止されることを意味しない。芸術だけは差別を行ないそれを促進する機能が許されてよいはずもない。問題はやはりポルノグラフィが本当に性差別の構造的な支えであるかどうかであり、行為空間とその他の言語空間へのその反射が存在すかどうかである。

第三にセクシュアリティの理解という点でゲイも奥平教授も深い考察を避け、現在あるセクシュアリティが性差別という現実とどのようにかわるかを考慮しない。セクシュアリティは国家が統制できるものではなく、個人的な道德心や美意識や嗜好の問題でしかないと考えるからであろう。セクシュアリティの深い考察を欠く奥平教授もゲイもポルノグラフィが女性の現実をあまりによく映し出していることから、あくまで現実（社会構造や行為空間）の反映としてポルノグラフィを見るだけである。もしポルノグラフィが単に現実の反映であるならば性表現だけを取り立てて批判することは奇妙であり、なぜ性行為の方を先に禁止しないかと問うのももっともである。ポルノグラフィ規制の執拗な要求はヒステリックな叫びのように聞こえてもおかしうはないであろう。

しかしマッキノンはポルノグラフィの問題を考えるうえでセクシュアリティへの洞察を不可欠な前提とするため、現実と瓜二つのポルノグラフィは単に現実の反映ではないことになる。マッキノンの見解は現在のセクシュアリティの認識を前提とする。それは、男性は性的対象を所有し消費するときにそのセクシュアリティを体験し、女性は性的対象として所有され消費されるときにそのセクシュアリティを体験するというものである。言い換えれば男性は物としての女性からイメージを引き出しそれとセックスをする。どんな男も女もいくらかのあそび、ゆらぎはあるもののこの現実のセクシュアリティから自由ではない。それは経済構造に第一義的に規定されるものではなく、セクシュアリティ

あるいはセックスのもつ特徴から、幻想（芸術）と現実（生活）が交錯する社会的な現実に基づきを持つ。それがポルノグラフィである。したがって女性差別の社会から両性の平等な社会に変えるためにはセクシュアリティを変える必要があり、そのために女性差別が存在できる現実の基礎たるポルノグラフィを禁止するしかないというポルノグラフィ規制のシナリオができていく。

したがってこの性表現の一部であるポルノグラフィはマッキノンにとって性表現であるとともに性行為である。その意味するところは自慰行為の補助、没社会性という特徴から猥褻物を特徴づけ、それゆえ表現ではないという主張とまったく異なることはわかるであろう。ゲイもそのことを認めているようにマッキノンはポルノグラフィの社会的な機能一点に焦点を当て議論を進めているのである。

第四に奥平教授はポルノグラフィの定義に関わる用語を問題にしている。女性解放家は猥褻文書の中で女性をセックスの単なる対象として表現すると非難する。しかしこれに奥平教授はつぎのように反論する。単なる性的な対象としての女性の表現もとどのつまり表現であり、猥褻文書の中では男性も女性もその表現の単なる対象でしかない。つまり表現という大きな対象化のなかで性的な対象化が描かれているだけだという主張であろう。

この批判は非常に興味深い。なぜならマッキノンが指摘したポルノグラフィの美学が活用できるからである。女性を単なる性的な対象として描くこと（性的な対象化）は男性の（あるいは客観的な）視点からすれば、表現のための対象化以外の意味を持たない。この対象化が許されているならば、なぜ女性がある特定の属性を持ったものとして表現してはいけないかあるいはそれを受容してはいけないかという疑問に変わる。

しかしこの対象化が無害だと思うのは表現者とその表現の受容者（つまりポルノグラフィにおいては男性）だけであろう。マッキノンのいう現在のセクシュアリティを前提にするならば、対象化つまり客観的な描写だけで表現者と受容者は性的に興奮できることを見逃している。この対象化はそれだけで女性を性的な物、対象として使うことを意味する。ポルノグラフィがその消費者に望むものを提供する方法（ポルノグラフィの美学）は、観察者の視点で客観的に

セックスを描写することであるとマッキノンはいうが、これが正しいならば客観的な対象としてだけ女性を表現することはそれだけで、性的な意味を伝達し、さらにそれに追い打ちをかけるように単なる性的対象としてのイメージを掻きたてるのがポルノグラフィなのであるから、女性にとってのその害悪の重さは同様に対象化される男性といかに異なるかは理解できるであろう。

第五に奥平教授は猥褻文書の中で女性は男性の性欲をそそるような仕方であられもない、恥ずかしい格好をさせられているという女性解放家からの非難を検討し、それはむしろ古風な女性像を前提とするから女性の尊厳が汚されたと思ってしまうのではないかと述べている。しかしこの言い回し（「恥ずかしい」等）は猥褻のあの抽象性を意味し、女性を主体にして言い換えたただけのように思われる。猥褻とポルノグラフィの区別を前提としない議論のように私には思われる。

第六に奥平教授は猥褻文書からどのようなメッセージを受け取るかは女性のなかでも意見が分かれるのではないかとすれば層としての女性を猥褻文書が蔑視しているとも言いがたいのではないかと問いかけている。しかしここでの問題はすでに女性の個々人の受け取りかたの相違を前提にした、層としての女性に与える害悪であり、マッキノン自身指摘しているように女性差別も言論の自由と同様にシステムとして存在するかどうかが問われているのだと思う。

そして最後に奥平教授はいずれは男性のように女性もさらに社会に進出すればやはり女性に合った性表現文書も生まれてくるのではないかと問いかけ、その場合でも性表現文書はそもそも女性の敵であるという本質規定はかわらないのかと問いつめている。しかしここにも誤解がある。まさにこの女性に合った性表現文書を獲得するためにもマッキノンはポルノグラフィ規制論を展開しているのではないだろうか。彼女は女性に表現する機会を与える積極的な施策を支持するとともに、現実のセクシュアリティの分析に基づき、女性差別をなくすためには表現の自由の保障のあり方としてポルノグラフィに対する公的な規制という形態を容認する。ポルノグラフィ規制は女性が主体となる表現行為とともに女性にとっての一つの表現形態となる。たしかに彼女の論理からすれば、女性の芸術家が描くポルノグラフィや現在経済的に自立している女性が支

持するそれにも規制が及ぶ理屈になる。それは一見論理的に一貫していないように思われるかもしれない。しかもその女性の表現をどう扱うかという問題には難しい利益衡量が不可避であることも確かである。しかしマッキノンがいうようにセックスまたはセクシュアリティの特徴から性に関わる表現と他の表現とは異なり、ポルノグラフィが女性差別の元凶であるとするならば、女性差別をなくす手段として、女性の社会進出を促進するための社会構造に関わる変革や男女平等の教育の充実さらに市民による女性差別に対する抗議運動だけではなく、また女性の表現者・書き手をさらに増やすことだけではなく、ポルノグラフィ規制という手段が不可欠になるであろう。念のために言うならば彼女は性に関わるすべての表現を葬り去ろうとしているのではない。ポルノグラフィの定義からも理解できるように、マッキノンはポルノグラフィ＝(イコール)性表現文書であるとは考えていない。

おわりに

以上のようにポルノグラフィ規制をめぐる議論の一端を見てきた。最終的には道徳の問題だとするゲイや奥平説とあくまで性差別の問題なのだとするマッキノンのフェミニスト批評とは議論が噛み合わない印象を持ったが、その根本の原因はセクシュアリティの理解にあるように思われる。つまりそれは変わり得るのか、変わるとすれば変えるべきなのか変えるべきでないのかという点である。また変えるべき理由にもそれが制度(人権や国家権力のあり方)にまで関わるという理由でか、それとも個人的な次元に止まる理由かである。そして最大の対立点は、それを変える手段の問題であり、国家権力の源泉をどう理解するかである。

いずれにせよマッキノンの主張は啓発的であり言論の自由の研究を続けるうえで見落とせない議論であろう。彼女の他の研究にも注目して行きたい⁶⁶⁾。

66) 石山文彦「差異と平等(序説)ーアメリカのフェミニズムにおける平等概念の包括性ー」日本法哲学会編『現代における<個人ー共同体ー国家>』(1990年)179ー88頁、高井裕之「憲法における人間像の予備的ー考察(三)ーアメリカにおける *feminine jurisprudence* を手がかりにしてー」『産大法学』25巻3・4号(1992年)161ー83頁参照。